

海水浴場での「安全」と ライフセーバーの活動について

公益社団法人 日本防犯設備協会 理事
キング通信工業株式会社 代表取締役社長

茂木 俊介



今年も熱中症対策に注意を払う必要がある暑い季節がやってきました。政府からはマスクの着用に関する新しい指針や海外からの観光客の受入れ再開など3年目を迎えたコロナ禍の生活にも変化が見られます。この会報が発行される頃には夏の旅行を具体的に計画されている頃かと思います。

私は学生時代にライフセービング部に所属し夏場に海水浴場で監視業務をさせていただいたことがあります。今回は海水浴場での「安全」のために知っておいていただきたい3つの事をライフセーバーの活動と併せてご紹介させていただき、海水浴を楽しまれる方の参考になればと思います。



写真提供:日本ライフセービング協会



写真提供:日本ライフセービング協会

①海水浴はライフセーバーのいる海水浴場で

旅行の際、楽しい時を過ごすために旅行先の様々な情報を調べたり、その土地の気候にあった洋服や持ち物を揃えたりと準備をされるかと思います。

では、海に遊びに行く時に海の事をどれだけ調べたり、行くための準備をしたりされていますでしょうか。経験あるサーファーは自分の行く海で良い波に乗るのはどの辺りが良くて、どの時間帯が良いのか、またどこが危ないのかなど自分が行く海の事を熟知しています。楽しい時間を過ごすためにはそのような準備が大切です。また、海や浜は自然です。自然は楽しみを与えてくれると同時に当然そこには危険も存在します。海はその日の天気、風、波の高さ、潮の流れや満ち引きなど状況によっても表情が一変します。その事も覚えておく必要があります。

海で楽しく過ごすためにはその海をよく知っている人から情報をもらうのが一番です。ライフセーバーのいる海水浴場ではその海で安全に楽しく過ごすために必要な情報や知識を提供してくれます。ライフセーバーはその資格のための勉強だけでなく、先輩や地元の方々と協力して活動をする中で様々な知識や経験を得ています。

学生時代に私が監視を行なっていた浜のことです。朝、監視が始まる前に一緒に監視活動をしている漁協の方から声をかけられ「今日は白旗(遊泳可)でいくのか?」と聞かれたことがあります。その日は天気も良く、風もほとんどなく絶好の海水浴日和に思えた私は最初その言葉の意味がわかりませんでした。漁協の方は雲を指差して「ああいう雲が出ている時は午後から風が強くなる」と教えてくれました。その漁協の方の言葉通り午後からは強い風が吹きはじめ、遊泳には非常に注意が必要となる状況になりました。漁師の方の知識の素晴らしさを実感した時でした。

海水浴に行かれる際、海に着いたら監視所がどこにあるのか監視タワーがどこにあるのか確認し、満潮干潮の時間、子どもを遊ばせるのにはどの辺りが安全か、気をつけたるべき危険な場所などを掲示板で確認したり、ライフセーバーに聞いてみたりすると良いでしょう。もし満ち潮の時にどこまで波が寄せてくるのかを知らないで荷物を置いていたら、その場所が満潮時に水浸しになってしまふかもしれません…

※ライフセーバーのいる海水浴場は公益社団法人日本ライフセービング協会(JLA)のホームページ(jla-lifesaving.or.jp)から確認することができます。



写真提供:日本ライフセービング協会



写真提供:日本ライフセービング協会

②Keep Watch!(目を離さない)

「ライフセーバー」=「救助する人」のように思われてしまうことがあります、救助はライフセーバーの一面でしかなく、ライフセーバーが本来目指すのは事故ゼロです。実際に救助する状況がないのが理想です。

ライフセーバーに頼る前にまずは一人一人が事故にあわないよう気をつけることが何よりも大切です。

特に子ども連れて海を楽しむ時は何よりも子どもから目を離さないことが大切になります。海に入らなくても岩場や磯での生き物を探したり、水溜りで水遊びをしたり、楽しい事はたくさんあります。家庭用の小さなプールなどでも同じことですが、これくらい大丈夫だろうと思って子どもから目を離してしまい、子どもの異変に気づかず事故に繋がってしまうことがあります。事故は静かに起きるとも言われます。

迷子も夏場の混雑した海では良くあります。浜辺はどこも同じように見えるため、遊び始める前に自分達のいる場所を建物などの位置を目印にして覚えておくことは迷子だけでなく遊泳中自分が流されていないかに気づくためにも大切です。

万一迷子の時も監視所やライフセーバーに声をかけ迷子のアナウンスなどをしてもらえる海水浴場もあります。

いなくなった子どもが、もしも何かの事故に遭っていたとしたら…と心配される親御さんが毎年多くいるはずです。Keep Watch!決して目を離さないでいることが大切です。



写真提供:日本ライフセービング協会

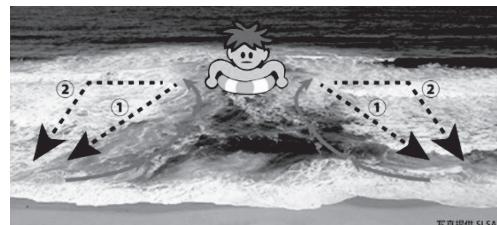
③離岸流に気をつけて

離岸流(リップ・カレント)についてご存知でしょうか。海で泳いでいる時、浜辺に戻ろうと思って泳いでいるのに泳いでも、泳いでもなかなか前に進まないといった経験をしたことがあるかもしれません。この原因として海水浴中の事故の中で大きな要因の一つである「離岸流」と呼ばれる浜側から沖側に向けて流れる強い水の流れが原因として考えられます。

離岸流は沖から打ち寄せた波が引く際に浜辺の水深がより深くなっているところに水が集まることで沖に向かって速い流れを作ることで発生します。その他にも強い沖に向かう風、潮流などを要因として発生する場合もあります。

この離岸流の流れの速さは泳ぎが得意な人でも流されてしまうほどの速さがあります。離岸流の中にいる事に気づいた場合にはパニックにならずに浜辺と並行に一度横に泳いで離岸流から離れるなどしてから浜辺に戻るようにしてください。流れに逆らって帰ろうとしても体力を使い果たして溺れてしまいます。

また、万が一助けて欲しい!という時には片手を大きく挙げ、左右に大きく振る「助けてサイン」を出して救助を呼んでください。



提供:SLSA



写真提供:日本ライフセービング協会

私が目の当たりにした離岸流での救助では、浮き輪をつけていた大人の男性が一瞬で沖まで流されていきました。その途中男性の浮き輪は外れてしまい、溺れてしまいました。ちょうど監視タワーの目の前で発生したことやIRBと呼ばれるエンジン付きの救助用のゴムボートがちょうど目の前で待機していたため迅速な救助がされ男性は無事でした。

離岸流が発生している場所は浜側から良く見ると波が崩れにくくなっていたり、砂が巻きあげられて濁っていたりしています。波が崩れにくくなっているので穏やかに感じてしまうかもしれませんが逆に気をつけなければなりません。

しかし、離岸流をすぐに見つけることは慣れないとなれば難しいかもしれません。是非、海で楽しまれる前に案内板やライフセーバーに注意すべき事を聞いてみると良いと思います。

最後に

安心・安全の知識は自分だけが知っていれば良いというものではなく、広く多くの方に知っていただき、事件・事故が起きないようにしていく必要があります。

今回の寄稿に際し日本ライフセービング協会(JLA)のサイト(jla-lifesaving.or.jp)を参考にさせていただきました。JLAは「水辺の事故ゼロのために」ライフセーバーの育成や様々な水辺の安全の啓蒙活動をされており、スマートフォンアプリによる海の情報提供や水辺での安全知識の啓蒙なども行われています。

我々の関わる防犯の世界でも同様に防犯設備士の育成や防犯のための啓蒙活動の重要性を再認識させられる機会となりました。